

俳句通信

特別作品25句 鈴木しげを「たまきはる」

特集〈6人の俳人 30句競詠〉

木内憲子 「扇置く」

渡辺誠一郎 「わが荒野」

坊城俊樹 「四万六千日の夜」

柳生正名 「未生まで」

神野紗希 「籠えゆく」

生駒大祐 「鹿」

30句近詠・南うみを「切子」

【円熟作家12句】

川崎慶子 「さはやかに」

磯 直道 「孫の手に」

深沢暁子 「行く雲」

【好評エッセイ】

老いの俳句・「老虚子の傑作」坪内稔典

廣瀬直人の世界・「句集『風の空』について

——その⑤」井上康明

明日への触手・「壁を崩す河馬——坪内稔典」西池冬扇



●作品● 須原和男・加古宗也・小島 健・横澤放川・西村和子・伊藤伊那男・能村研三・対馬康子・安西 篤・
米山光郎・白石多重子・すずき巴里・津久井紀代・尾村勝彦・田湯 岬・田中敏廣・赤塚五行・鈴木不意・
藏澤和治・中戸川由実・辻村麻乃・鎌田 俊 ほか

体育祭挙手で決めたる役回り

小俣 たか子

千葉県の北西部に位置する我孫子市には市民の憩いの場として手賀沼がある。対岸は柏市で、柏市で開催される花火大会（コロナ禍により2020年、2021年と中止）のときは、沼を挟んで見事な花火を見ることが出来る。沼沿いの遊歩道は朝夕のウォーキングの人、近くの学校の部活でランニングする生徒など賑やかだが、そのほかの時は静かなもので、自然に囲まれている暮らしを実感する。以前は舟でよく吟行し、白鳥に追いかけられたり、象鼻林を楽しんだりしたもので、その思い出は尽きない。



黄葉ですモンマルトルの恋人よ

羽村 美和子

句稿に行き詰まると、よく千葉公園へ行く。六月に咲く一面の大賀蓮（古代蓮）は、太古の風を感じる特別な空間を創ってくれる。（召人は美男に限る古代蓮 美和子）などと遊び心も生まれる。また雪のほとんどない千葉だが、池の小島の松の木には雪吊りが施される。（雪吊りの夜には鬼が琵琶鳴らす 美和子）など独特な風情を感じさせてくれる。曼珠沙華が少し色づいてきた。しばらくすると、紅葉と黄葉の共演が始まる。楽しみだ。



特集 6人の俳人 30句競詠

木内憲子(栞)

渡辺誠一郎(小熊座)

坊城俊樹(花鳥)

柳生正名(海原)

神野紗希(無所属)

生駒大祐(ねじまわし)

特別作品25句

たまきはる

鈴木しげを

蟬の穴十王在すところまで
長命寺蕎麦をあてなり夏帽子
暗転のごとくに空や蛭むしろ
岡虎尾草退路断たるる如くなり
鳩の子のその後はいかに井之頭
緑蔭より緑蔭へ水渡りけり

扇置く

木内 憲子

星涼し看取りのころの空のいろ
紅ければすぐに開きて水中花
夏雲や力を込めて人思ふ
蟬激し失ふことのなきごとく
日がちりちりと向日葵の地の記憶
短夜の聞きたきものに母のこゑ

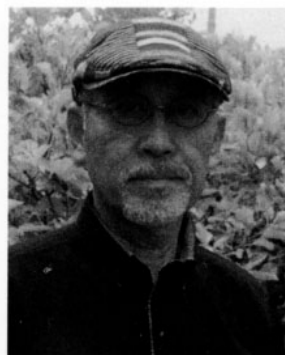


きうち・のりこ
昭和22年(1947)5月4日・長野県生まれ
55年「朝」入会 岡本眸に師事
平成29年「栞」松岡隆子に師事・同人編集人
句集に『窓辺の椅子』『夜の卓』

わが荒野

渡辺 誠一郎

一睡の後の余生や梅ひらく
祇王寺に女つれだす春の宵
春蝶を切手のように見ておりぬ
和簞笥をのせるとすれば花筏
地の果てに薄型テレビ花は葉に
砂町のにはんたんぽ踏むまじく



わたなべ・せいichろう
昭和25(1950)年12月13日・宮城県生まれ
佐藤鬼房に師事「小熊座」前編集長
句集に『地祇』『赫赫』など

四万六千日の夜 坊城 俊樹

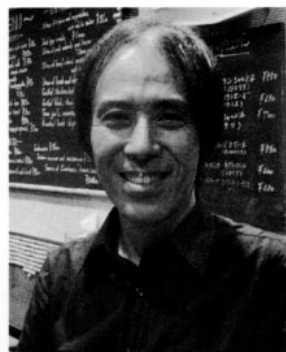
女優死す四万六千日の夜
愛しくもなき恋人にもらふ薔薇
稲妻や百度孕ませ百度石
惨憺たる土砂の水呑む夏の蝶
夏潮の記憶はすこし穢れたり
蛸は愛撫されたい人の声



ぼうじょう・としき
昭和32年(1957)7月15日・東京都生まれ
『花鳥』主宰 日本伝統俳句協会理事
句集に『零』『あめふらし』『壺』
著書に『空飛ぶ俳句教室』など

未生まで 柳生 正名

昼顔や猫仰向けて下の世話
天花粉はたき嬰兒^{ややこ}の生れ皺
きらきらと玉虫交み夢の外
縁側や人に蒸発蟬に殻
沈みをり夕立が名の駆逐艦
萍にゐて秋の蝶乾きをる



やぎゅう・まさな
昭和34年(1959)5月19日・大阪府生まれ
『海原』『棒』同人 句集に『風媒』

鯨えゆく

神野 紗希

翼竜の脚の鎖に蝶ふわり
クレソン摘む夢に私は少年で
瞳にミモザあふれて明日を疑わず
逃げたいと我を見つめて来る雛
烏芋うつつは水中の鈍さ
葉に眠る蝶をつまみて葉とす



こうの・さき
昭和58年(1983)・愛媛県生まれ
第1回芝不器男俳句新人賞坪内稔典奨励賞(2002年)
第11回桂信子賞(2019年) 現代俳句協会副幹事長
句集に『星の地図』『光まみれの蜂』『すみれそよぐ』
著書に『日めくり子規・漱石』『女の俳句』
『もう泣かない電気毛布は裏切らない』ほか

鹿

生駒 大祐

蝸の抱く幹の冷えまさりけり
かなかなや牛も面白さうに聞く
木犀やりいんと碗が碗を呼び
土塊を据ゑ山と呼ぶ白露かな
水に仰がれて橋ある秋気かな
秋を見る照れたる秋が拗ねるまで



いこま・だいすけ
昭和62年(1987)・三重県生まれ
「ねじまわし」同人
第3回攝津幸彦記念賞・第5回芝不器男俳句新人賞
第11回田中裕明賞(『水界園丁』にて)など
句集に『水界園丁』